

Eric J. Sharpe *The Universal Gita—Western Images of the Bhagavadgītā*,

Duckworth, London, 1985. xvi+188pp. £ 8.95

前川 輝光

西洋における『バガヴァッド・ギーター』(以下『ギーター』)の研究及び解釈史は、1785年のチャールズ・ウィルキンズによる英訳の出版を出発点としている。本書は、このウィルキンズ訳出版200周年に発表された。本書の意図するところは、まさにこの200年にわたる『ギーター』研究・解釈史の整理である。この研究は、ラーソンの1975年の論文⁽¹⁾に刺激されて1977年に着手された(p. ix)。『ギーター』研究・解釈史の整理としてはおそらく最初の本であろう。

タイトルには、“Western images”とうたっているし、また、G. R. ウェルボンの言葉を借りて、著者は本書を「19世紀及び20世紀における西洋思想史の包括的理解のための脚注」とも表現している(p. 174)が、インドにおける、あるいはインド人の手になる『ギーター』研究・解釈史にもかなりのページがさかれている。「序論」などを除いた本書の本論部分の三分の一はそうである。特に、インドで『ギーター』が民族運動の強力なシンボルとなる1885年(この年にインド民族運動の中核となった国民会議派が設立されたことを想起)以後については、インド、西洋にはほぼ均等にページが割当てられている。

本書はこの1885年を境に2部構成をとって

いる。即ち第1部で1785年のウィルキンズ訳の出現から、1885年のエドウィン・アーノルド『天国の歌』(*The Song Celestial*)までが論じられ、第2部では、1885年から、本書の出版された1985年までが論じられている。節ごとに西洋での動きとインドでの動きを分けて論じることはしてあるが、全体としては、両者は統一的に相互の影響をたどりながら論じられている。

本書の考察の対象は、学問的『ギーター』研究のみにとどまらない。「通俗的」(popular)な諸解釈も本書にとっては欠かせない資料であるし、それどころか「十中八九学問的研究以上に重要」(p. xv)である。意外な人物の『ギーター』との関わり、また『ギーター』への打込みよりのすさまじさを我々は本書から知ることが出来る。エマーソンは、『ギーター』を「あらゆる書物の中で第一のもの」と讃え、また1845年にウィルキンズ訳を入手した時にはまさに狂喜乱舞している(pp. 22-23)。ソーローは、『コンコードとメリマック』及び『ウォールデン』において『ギーター』に言及し、カルマヨーガの思想に魅せられていた(p. 27)。T. S. エリオットも詩集 *Four Quartets* (1943) で、『ギーター』やクリシュナに言及している。

本書の魅力の一つが、こうした様々な興味深いエピソードを知り得る点にあることは確かだが、ウィルキンズ訳以後の、西洋、インドにおける『ギター』研究・解釈史上の諸潮流の概観こそ何と云っても本書の眼目である。次に本書で論じられたこうした諸潮流を西洋、インドの順で見て行くことにしよう。インド学的専門研究の概観は最後に論じることにする。

学問的というより、より直接的な世界観上・信仰上の対決の相手として『ギター』と取組んだ西洋の知識人たちは、大きく二派に分け得る。一つは、『ギター』ないしヒンドゥー教に批判的な人々であり、インドにおけるキリスト教宣教師たちがその中心となる。代表者は、F. D. モーリス、R. D. グリフィス、J. N. Farquhar、J. P. ジョーンズ、R. コールドウェル、S. ケイヴ等々。神秘主義者 R. A. ヴォーンや、インド学者で高名なサンスクリット語辞典で知られるモニエル＝ウィリアムズ、宗教学者マックス・ミュラーもこの陣営に与したとされる。最近では、E. G. パリンダー（1968年に『キリスト教神学にとってのバガヴァッド・ギターの意義』を、1970年に『アヴァタールと化身』を出版）がこの潮流の代表者と目される。この潮流に属する論者たちは、『ギター』に対して比較的好意的な場合にも、「ヒンドゥー教徒は人間の本性と運命に関して重要な問いは提出するものの、それらの問いへはキリスト教の福音書のみが十分な解答を与え得る」（p. 34）と考え、あるいは、『ギター』は「キリスト教の福音の正統な準備段階」（p. 61）に過ぎないとしていた。この潮流に属するより批判的な論者たちは、『ギター』の業の教説や、結果にとらわれない行為を説くカルマヨーガの思想を「非人間的」、「無責任」等々激しく攻撃した。

この潮流と対極をなすのが、ロマン主義——ニュー・イングランドの超越論——神智主義の流れであり、1960年代アメリカの対抗文化にもその影響は及んでいると考えてよい

であろう。ロマン主義者では、J. G. ヘルダー、シュレーゲル兄弟、W. フンボルトが、超越論者からはエマーソン、ソーローが論じられる。神智協会の西洋人では、ブラヴァツキー夫人、A. ベサント、W. Q. ジャッジが主として論じられる。（ガンディーがその『天国の歌』によって『ギター』を知るようになる E. アーノルドは、エマーソンの友人でありまた神智協会員と接触すると同時に、F. D. モーリスの影響を受け、マックス・ミュラーの友人でもあるというように、いわば、二つの潮流のはざまにあった人物として論じられていて興味深い。）この潮流に属する人々にとり、『ギター』は、全人类的、普遍的意義を持つ經典であり、ヒンドゥー教的性格は『ギター』にとり二次的なものに過ぎない。直観的・神秘主義的性格をこの潮流の基本的傾向としてひとまずは挙げることが出来よう。彼等は多くの場合、それぞれの時代の正統的キリスト教へは批判的姿勢を保っていた。キリスト教道徳の拘束からは比較的自由だったのである（p. 88）。しかし、彼等の『ギター』理解は、シュレーゲル兄弟やフンボルトは別として、ほとんどの場合、インド学的専門知識の裏付を欠いていた。既に彼等自身が身につけていた一定の世界観を支持し強化する素材を『ギター』の中に見出そうとする場合がしばしばであったとされる。

インドにおける近代以後の『ギター』解釈は、社会・政治を志向する潮流と、特にそれらを志向しない、あるいはそれらに無関心な潮流に大別し得る。社会・政治志向の解釈者として本書で論じられているのは、ラームモハン・ローイ、ベンガルにおける「クリシュナ・ルネッサンス」の論客たち（バンキム・チャンドラ・チャッテルジー、N. C. セーン等）、オーロビンド・ゴーシュ、ベンガル以外では、G. ティラク、マハートマ・ガンディー、J. ネルー、P. N. Bazaz、K. M. パニカル等である。このうち特に、チャッテルジー、セーン、ゴー

シュ、ティラク、ガンディー、パニッカルは、アヴァタール（化身）としてのクリシュナ、クシャトリヤの理想、ニシュカマ・カルマ（結果にとらわれない行為＝カルマヨーガ）を説く『ギター』の社会的政治的意義を高く評価する。他方、ネルー、Bazazは、『ギター』に見られるカースト制度肯定と、ニシュカマ・カルマの反進歩主義的性格の故に、『ギター』に対して批判的である。

インドの『ギター』研究・解釈上のもう一方の潮流については、M. ミュラーの『東方聖典』に参加した唯一の非ヨーロッパ人たるK. T. テラング、ポンディシェリーに移って後のA. ゴーシュ、ラーダークリシュナン、神智協会のインド人会員であったS. ロウ (Row), M. M. チャッテルジー、アメリカで対抗文化の時代に注目された Chinmoy, A. C. バクティヴェーダーンタ（「ハレ・クリシュナ」運動）がとり挙げられている。この中でロウは、寓意的 (allegorical) 『ギター』解釈を打出し、神智協会の白人会員（特にブラヴァツキー）から影響を受けると同時に、（シャープは明言していないが）ベサント、ジャッジの寓意的『ギター』解釈に影響を与えている。自らも神智協会の準会員であったガンディーが、この協会の『ギター』解釈の特色である寓意的解釈から多大の影響を受けたとするシャープの整理 (pp. 116-7) は興味深く、ガンディーのグジャラート語訳『ギター』⁽²⁾ 序文等を参照する時、おそらく正しいと思われる。また、対抗文化について論じた箇所では、著者の筆はしばしば相当意地の悪いものとなっているように思われる。

ヒンドゥーにとっては、近代以後も、『ギター』は、アプローチの方向を問わず「生きた経典」なのであり、このことの認識が、従来の西洋における『ギター』解釈学には完全に欠如していたと著者は批判する (p. xii)。本書のかなりのページがインド人の手になる『ギター』研究・解釈にさかれ

ていることの一つの理由であろう。

本書は専門的なインド学者・東洋学者の『ギター』研究をも概観している。かつては『ギター』の歴史的起源をめぐる議論が盛んだった。特に、R. ガルベ及びR. オットーによる「原ギター」の探求は、大きな論争を引きおこした。著者は、史料的に証明不可能であるとして両者の議論とは距離を保ちながらも、一定の意義を認めてもいる。それは、『ギター』を『マハーバーラタ』の一環としてそれとの強い関連において見る見方であり、著者はこれを妥当なものとして断じている (p. 124)。こうした見方の延長上には、インド思想史上のクシャトリヤの意義に注目する『ギター』研究が成立する。その代表者として著者が取上げたのは、ドイツのインド学者で、1933年にドイツ信仰運動 (Deutsche Glaubensbewegung) を設立しナチズムとも接触を持ったJ. W. ハウエルである。評者は本書によってはじめてハウエルの『ギター』研究の大略を知り、マックス・ウェーバーの『ギター』研究との少なからぬ類似点に驚いている。即ち(1)インドは、瞑想する隠遁者の国であると同時に、行為者の国でもあるとの認識、(2)英雄的エートスへの注目、運命概念、(3)現世内行為による救済⁽³⁾。シャープは、「ヒンドゥー教と仏教」で展開されたウェーバーの『ギター』論には言及していないが、両者の関連は追求してみる価値がありそうに思われる。

クシャトリヤの意義を強調する論者として、本書では他に、A. Törngren (*Opium för folket*, Lund, 1969), A. ゴーシュ, A. ベサント、ティラクを挙げてある。評者には、ガンディーもまた、クシャトリヤ的ないし戦士のエートスの問題を『ギター』解釈にあたって重視した人物であると思われるが⁽⁴⁾、本書では、ガンディーは専ら非暴力の立場からの『ギター』解釈者として論じられ、ハウエルの対極にいる人物とされている。

本書で論じられたインド学者たちには、他

に、『新約』からの『ギーター』への強い影響を主張したF. ローリンザー、また、V. Cousin, E. L. Burnouf, E. ラモット、P. Hubertのフランス人研究者たち、P. ドイセン、A. ホルツマン、E. W. ホブキンズ、G. A. グリエルソン、N. マクニコール、F. エジャートン等がいる。このエジャートンの1925年の著書⁽⁵⁾あたりから、現在の西洋における『ギーター』研究の主流をなす潮流が明確化し始めるのだが、この潮流に属するR. C. ゼーナーの機能主義的『ギーター』研究は、現在最も定評あるものの一つである。それは、「ヒンドゥーの『ギーター』解釈・注釈の支配的伝統と同盟を結」(p. 155)び、『ギーター』の本質的統一性を確信している。ゼーナーにあっては、『ギーター』の起源と年代という古い批判的諸問題はほとんど完全に度外視されている」(p.155)。

著者自身認めているように、論じ残された資料や問題も数多いが、近代以後の『ギーター』研究・解釈史の最初の本格的な見取図として本書の意義は極めて高いと言い得るで

あろう。

(注)

- (1) G. J. Larson, "The Bhagavad-Gītā as cross-cultural process", in *Journal of the American Academy of Religion*, X VIII/14.
- (2) M. Desai, *The Gospel of Selfless Action or The Gita According to Gandhi*, Ahmedabad : Navajivan, 1946, にはその英訳が収められている。
- (3) ウェーバーの『ギーター』論に関しては拙稿「ウェーバーと『バガヴァッド・ギーター』」、『思想』1988年5月号、参照。
- (4) 東京外国語大学海外事情研究所『地域研究ブックレビュー』第6号(1989年)所収のチャンドラン・D. S. デーヴァネッセン『マハートマーの生誕』への前川の書評を参照。
- (5) F. Edgerton, *The Bhagavad Gita*, Chicago, London : Open Court.